

# 新に確定された青洲の乳癌患者三名の死亡年月日

松 木 明 知

〔要旨〕 華岡青洲の乳癌患者一五五名中、全身麻酔下の最初の手術を受けた藍屋勤を含めて、わずか五名の歿年月日が知られているのみで、残りの一四九名については、全く不詳である。その主な理由は、「乳巖姓名録」の記載が不正確なためである。「乳巖姓名録」に見られる寺院の過去帳を实地に調査して、二名の患者の歿年月日を確定できた。一人は神戸の高福寺の住職の妻で、一八一三年二月二十日歿、もう一人は本光寺の住職の妻で、一八三四年七月八日に歿している。術後の生存期間は前者で一年四ヶ月、後者で一年三ヶ月である。この調査中偶然にもう一人の患者の歿年月日を知ることが出来た。以上により、現在「乳巖姓名録」中、八名の患者の歿年月日が判明したことになる。

キーワード—— 華岡青洲、麻沸散、乳巖姓名録、乳癌手術

## 一、はじめに

華岡青洲の事績に関しては、呉秀三<sup>(1)</sup>以来多くの先学の研究<sup>(2)(3)(4)</sup>があるが、その大半は呉の研究を踏襲したものであった。<sup>(1)</sup>

著者は青洲の系譜において、青洲在世時の華岡家の菩提寺である地藏寺（現在は無住となっている）の過去帳を見出し、それによって従来不詳であった青洲の同胞や子女の俗名や歿年月日について明らかにすることが出来、この方面で大きな進歩があった。

青洲は開発した麻沸散を用いて各種の手術を行ったが、最も精力を注いだのが乳癌手術であったことは「乳巖姓名録」が遺されていることによっても容易に理解される。しかしどのような手術成績であったかは殆ど知られていない。というのは「乳巖姓名録」によって患者の出身地、氏名などが知られるものの、彼らがいづつ死亡したかが全く不明なためであった。「乳巖姓名録」には、再発、三発の患者を除くと、合わせて一五五名の患者が記載されているが、その中で死亡年月日が判明しているのは最初の全身麻酔の患者藍屋利兵衛の母勘を含めてわずか五名（三・二％）で、この五名すべては著者によってその死亡年月日が確定されたものである。

この作業が大変困難であることは「乳巖姓名録」の記載、つまり年月日、住所、患者氏名のいずれもが必ずしも正確ではないことにある。これに加えて明治維新や第二次世界大戦を含む時代の流れがあり、子孫がその地に現在も居住している例は皆無であること、さらに菩提寺が特定出来ても死亡年月日を証明する過去帳が火災などで失われていることが多いなどによる。このような三つの要因によって「乳巖治験録」中の患者の死亡年月日を確定することが困難なのであり、著者が過去三十数年懸命に努力しても、わずか五名しかその歿年月日を特定出来なかった理由もここにある。今回発想を変えて患者の死亡年月日について鋭意調査し、新たに「乳巖姓名録」中三名の患者の死亡年月日を確定できたので報告する。

## 二、対象患者の選択と実地調査

「乳巖姓名録」中、患者の子孫がその住所に現在でも居住している例や子孫が特定出来る例は殆どない。もし居住して

表 1 「乳巖姓名録」中の寺院の室の例

38	文化八 八 二二	摂州兵庫尻池村	光福寺	室
79	文化十四 六 二九	房州味形	光林寺	内
131	文政七 九 八	勢州庵芸郡白子下徳居村	光善寺	息女
139	文政十 一 二四	泉州岡田	西光寺	娘
153	天保四 三 二五	勢州津在田中	本光寺	内室

などの記述は最少必要な事項に限定したことをお断りしておく。

(一) 光福寺 室 (摂州兵庫尻池村)

「摂州兵庫尻池」は現在の神戸市長田区尻池である。長田区の寺院で「コーフクジ」と発音されるのは西尻池町四一―二二二の高福寺のみである。従って「光」は「高」の誤記である。正応二年(一二八九)の創建になり、近年創立された寺院でない。

高福寺の室は「文化八年(二八一二)八月念二日」に治療(初診か手術日か不明)を受けたとあるが、天明五年(二七八五)から記載のある過去帳を閲すると、第九世住職の妻(坊守)は文化八年(二八一二)七月以前に歿しており、対象外である。

いたとしてもそれを姓名のみからは特定できない。地位の高い武家の妻、豪商や高名な文人などの妻女でもなければ、不詳であるのが当然であろう。

しかし視点を居住に移すと、百〇二百年という時の流れの中で存続しているのが寺院である。寺院とて時代の有為転変の中で、廃寺、移転などを免れないが、しかし存続の可能性は一般庶民の家に比べると格段に高いことは明らかである。

そこで著者は患者中の住職の妻女の例を「乳巖姓名録」<sup>(6)</sup>に求めて表一のよう左の五例を得た。表の頭書の番号は著者が便宜上、「乳巖姓名録」<sup>(6)</sup>中の患者に順番に番号をつけたものである。この中の四寺院を直接訪れ、過去帳などを平成十三年(二〇〇二)一月から三月にかけて調査した。以下各寺院毎に分けて述べているが、プライバシーや寺院の要請の問題もあり、法名、俗名

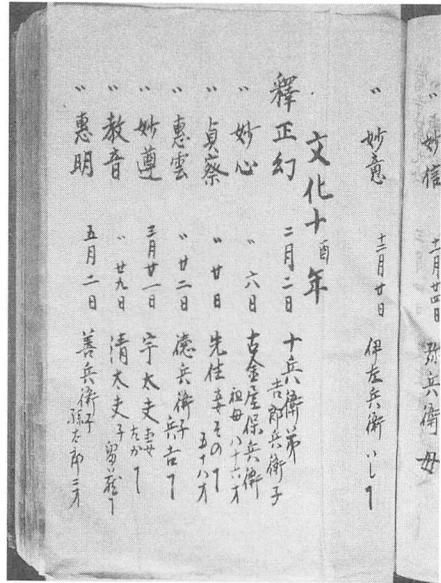


写真 1

第十世の住職積専察法師は文化八年（一八一）三月四日に歿しており、第十一世の住職積専了は文久二年（一八六二）二月十二日に歿し、その妻（柳泉寺の住職の妹、俗名は不明）は安政二年（一八五五）十一月二七日に四六歳で歿している。安政二年（一八五五）に満四五歳であるから、文化七年（一八一〇）の生まれである。そうすれば治療が行われた文化八年（一八一）には未だ一歳だったことになり、この人物ではない。

1)

文化十四年二月廿日

積 貞察 先住 妾 その丁

五十八才

「妾」は妻のことである。

文化十年（二八一三）当時の住職は第十一世であるから、「先住」とは第十世専察のことである。この「その」の法名も第十世住職の「専察」と「貞察」と「察」の字が対応しており、住職の室であることから、この「その」が青洲に治療を受けた人物であると特定してもよい。そうとすれば「乳巖姓名録」の期日を手術日と仮定すれば、術後約一年四ヶ月生存したことになる。墓碑はない。

(二) 光林寺 内（房州味形）

房州には「味形」なる地名は存在しないし、「コウリンジ」と発音される浄土真宗の寺院を全く見い出すことは出来な

かった。従って光林寺については後日を期したい。

(三) 光善寺息女(勢州庵芸郡白子徳居村年二十又六、核量三十銭)

勢州庵芸郡白子徳居村は現在の鈴鹿市徳居町で、その一二〇二番地に光善寺が現存している。光善寺住職の息女は文政七年(二八二四)九月八日に治療を受けたことになっているが、当時の住職は第六世の知暁法師で、この住職は文政十二年(二八二九)四月十五日歿している。従って患者はこの知暁法師の娘である。

しかし古い「過去年回帳」は痛みが甚だしく解読不能であり、明治二十年(一八八七)に改めた「過去年回帳」の中で唯一人可能性がある人物は、文政八年(二八二五)八月十一日の条の「釈即横妙起信女 当寺つい日永ニテ死ス」である。この人物が直ちに知暁法師の息女と特定出来ない。この寺と「日永」(地名)とは親戚関係にあり、もし仮にこの人物が手術を受けたとすれば術後約十一ヶ月と少し生存したことになる。しかしこれはあくまでも仮定である。

(四) 西光寺 娘(泉州岡田)

「泉州岡田」は現在の泉南市岡田で、西光寺はその五丁目三十一―三に現存している。「乳巖姓名録」<sup>⑥</sup>によれば「文政十了亥正月二十四日」に住職の娘が治療を受けた。住職一族の法名、歿年月日を纏めて記載した過去帳一冊が遺されているが、文政十年(二八二七)以降で、手術を受けた可能性のある人物は唯一人文久二年(二八六二)二月十一日に歿した「妙孝」である。住職の了議の「第六娘」とある。他の娘についての記述がない。他の五人の娘は他家に嫁したと考えられる。この第六女がこの寺で歿しているのは、乳房の手術を受けたため、一生を生家で終えたと考えられる。

(五) 本光寺 内室(勢州津在田中)

「勢州津在田中」は現在の津市片田田中町で、その二十番地に本光寺がある。住職の本折純熙師は、以前このことが地元で話題になった際、過去帳を調査し、天保四年(一八三三)三月二十五日以降歿した住職の妻の歿年を調査したことがあるという。天保四年(一八三三)当時の住職は第九世の「法城」であった。「暉耀山本光寺檀中過去帳(上、下)」の中、

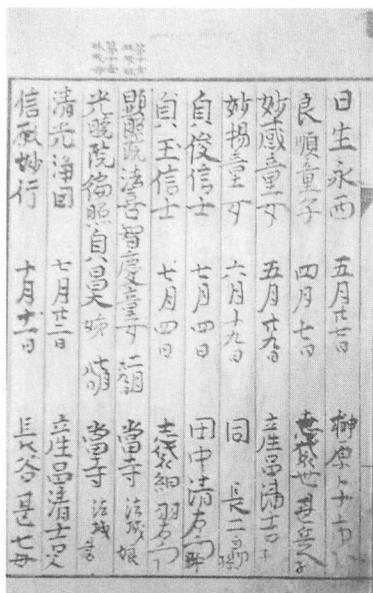


写真 2

天保五年（一八三四）の条に

光院院偏照貞昌大姉

七月八日 当寺法城 妻（写真2）

とある。俗名は不詳である。墓碑は無い。歿年月日から第八世の妻は天保四年（一八三三）以前に没しており、第十世の妻は年令的に該当せず、患者の可能性は全く否定されるので、右の人物が手術を受けたとしてよいと考えられる。術後一年三ヶ月生存したことになる。

### 三、八名太郎左衛門の妻

今回の寺院の調査で、明確に患者の歿年月日を特定出来たのは二名のみであった。この調査中偶然にも光善寺の方から平成五年（一九九三）三月二〇日付、「朝日新聞東海綜合版」の華岡青洲に乳癌の手術を受けた人物の記事について御教示戴いた。それは愛知大学の田崎哲郎氏の研究で、「乳巖姓名録」の「文政七年五月三日三河柳郡名号村太郎左工門母」とある患者である。田崎教授は名号村の旧家であった豊橋市在住の八名昭司氏の祖先であることを突き止め、菩提寺である鳳来町（名号村）の石雲寺の過去帳に「文政七年十月初三日 繁室貞昌大姉 太郎左工門 内」とあるから同一人物ではないかと考え、術後五ヶ月生存したとしている。しかし著者は「太郎左工門」の「母」と石雲寺の過去帳中の「内」つまり妻では大きく異なり、どちらかが手術を受けたのか特定出来ない、つまりこれだけでは患者と歿年月日を特定出来たとは言えないと考えた。

改めて八名昭司氏にお願いして、同家系図と同家の菩提寺である愛知県鳳来町名号の石雲寺で、過去帳と同家の墓碑

を調査した。

「太郎左衛門」という名は代々襲名しているので、これのみでは何代目の「太郎左衛門」か不明である。「乳巖姓名録」<sup>(6)</sup>によれば「太郎左衛門」の母が治療を受けたのは文政七年(一八二四)五月三日である。しかし石雲寺の過去帳二冊中、命日別に記載されている古い方の過去帳には、戒名の下に「太郎左衛門 母」とあり、比較的新しい歿年毎に記載されている過去帳には「太郎左エ門 内」とあつて食い違いが見られる。歿年月日、法名については両者には違いはない。「太郎左衛門」の「母」であるにしても、「内」であるにしても、患者は代々の「太郎左衛門」のいずれかの妻であるからその一人一人について八名家の系図と過去帳で調査した。

患者として最も可能性の高いのは第四七代の「太郎左衛門(俗名兵助)」の妻である。法名は「繁室貞昌大姉」で文政七年(一八二四)十月三日に歿している。第四七代の太郎左衛門は文化八年(一八一)二月五日に歿しているから、文政七年(一八二四)には第四八代になっていたはずである。ところが第四七代の太郎左衛門が比較的若くして歿したので、その弟が四八代として跡を継いだ。しかしこの第四八代、法名「聖公同道賢居士」は文政五年(一八二二)一月四日に歿し、その妻「心応妙性大姉」も文化十三年(一八一六)七月十三日に歿している。従つて患者はこの四八代の「太郎左衛門」の妻ではありえない。そうすると文政七年(一八二四)当時に「太郎左衛門」を名乗っていたのは第四九代の「太郎左衛門(俗名太四郎)」である。第四九代の法名は「請翁良田居士」で弘化三年(一八四六)五月二八日に歿している。この妻「みを」は文政六年(一八二三)十月三日に歿した。そのため「みを」の妹「りと」が後妻となった。なお「りと」は安政五年(一八五八)十二月八日に歿している。後妻の「りと」は、文政七年(一八二四)五月三日には、姉が歿して半年も経っていないから、未だ「太郎左衛門」の妻になっていなかったと考えられるから、「りと」も患者の候補者から除外出来ると思う。

第四六代の妻「正室貞因大姉」は享保二十一年(一七三六)三月二十日に歿しているから、もちろん患者ではありえない。



写真 3

い。

以上から文政七年（一八二四）五月三日に青洲から治療を受けた人物は、第四七代の「太郎左衛門」俗名兵助の妻「繁室貞昌大姉」としてよいと思う。そうすれば術後五ヶ月生存したことになる。石雲寺の八名家の墓碑は大半が夫婦墓であり、その中の一つに写真3に示すように高さ約六十センチメートルの墓の碑面に「離相浄念居士」と「繁室貞昌大姉」と刻されている。碑に向かって左側面に妻の歿年月日「文政七年申十月三日」が刻まれている。

### おわりに

「乳巖姓名録」中に見られる青洲在世中の乳癌手術患者一五五名の中、三名についてその歿年月日を特定することが出来た。一人目は摂州高福寺の室「積貞察」俗名「その」で、文化十年（一八一三）二月二十日に歿しており、術後約一年四月生存した。

二人目は勢州津の本光寺の内室で、俗名は不詳であるが、天保五年（一八三四）七月八日に歿しており、術後約一年三ヶ月生存した。最後は三河名号村の「太郎左衛門」の母である。八名家第四七代の太郎左衛門の妻で俗名は不詳であるが、術後約五ヶ月後の文政七年（一八二四）十月三日に歿している。

以上によって、「乳巖姓名録」中、歿年月日が確定したのは八名となった。

擱筆するに際して、調査に種々御協力戴いた神戸市長田区の高福寺、泉南市岡田の西光寺、津市片田の本光寺、鈴鹿市徳居町の光善寺、また豊橋市旭町の八名昭司氏には同家の系図など貴重な史料を閲覧する機会を与えて下され、心からお礼申し上げる。愛知大学文学部の田崎哲郎氏には種々御教示戴いた。併せて深謝の意を表する。

#### 参考文献

- (1) 呉秀三『華岡青洲先生及其外科』、吐鳳堂、東京、一九二三
- (2) 森慶三、市原硬、竹林弘『医聖華岡青洲』、医聖華岡青洲顕彰会、和歌山市、一九五四
- (3) 南圭三(代表)編『華岡青洲』、和歌山県那賀町、那賀町華岡青洲をたたえる会、一九七二
- (4) 上山英明『華岡青洲先生その業績とひととなり』、医聖華岡青洲顕彰会、那賀町、一九九九
- (5) 松木明知「地蔵寺過去帳による華岡青洲の系譜に関する新知見」『日本医史学雑誌』四五巻一号、四五〜七六頁、一九九九
- (6) 前掲文献(1)の二七四〜二八六頁
- (7) 松木明知「地蔵寺過去帳による華岡青洲の乳癌手術患者三名の死亡年月日」『日本医史学雑誌』四四巻四号、四九九〜五〇八頁、一九九八
- (8) 朝日新聞(東海綜合版)一九九三年三月二十日(土)第二五面
- (9) 田崎哲郎「在村知識人の成長」辻達也編『近代への胎動』、東京、中央公論社、二七一〜三二八頁、一九九三年

(弘前大学医学部麻醉科)

## The Death Dates of Seishu Hanaoka's Patients with Breast Cancer

### A Report of Newly Identified Three Patients

Akitomo MATSUKI

Among 155 patients with breast cancer treated by Seishu Hanaoka the exact death dates of only five patients including Kan Aiya, the first to have received a tumor excision under general anesthesia are known to us and the remaining 149 patients remain unclarified concerning their death dates. The reason is mainly due to a fact that the descriptions of “Nyugan Seimei Roku” (A Name List of Breast Cancer Patients) are inaccurate.

According to recent field survey on the burial records of several temples which have been described in the “Nyugan Seimei Roku,” the author could clarify the death dates of two patients. The one is the wife of Kohfuku-ji Temple's priest who died on Feb 20, 1813, and the other in the wife of Honko-ji Temple's priest, died on July 8, 1834. Both survived 1 year 4 months and 1 year 3 months, postoperatively. One more patient's death date is identified by chance.

Consequently, the death dates of eight patients among 155 have been identified so far.